



理事会だより (5・13)

一、小田原市の佐次図書館長より、第三回藤田湘子記念俳句大会(令和4年4月16日)につき説明があり、当協会への共催および実行委員・審査員派遣の要請を受け異議なく承認。実行委員は長谷川副会長・村場広報部長、審査員は池田会長・長谷川副会長・山田副会長に。

二、各部報告 総務部…定期総会終了報告、今年度会員数は最終的に一六〇名、新理事の田中恵一さん理事会初参加。事業部…大会作業が順調に進捗出来る体制が定着。会計部…桜まつり会計報告、年会費未納は現在2名。

三、文化の日俳句大会(11月3日)の兼題・寿齢者表彰等来月の理事会で決定する。(事業部)

四、秋の吟行会(総務部担当)は小田原フラワーガーデンで実施の方向で検討中。

五「俳句の岸边」につき校正に入る段階との報告。

「俳句おだわら」10句抄 (645号より)

木村和彦 抄出

白酒に酔うているのか弥次郎兵衛
湖へ向くバージンロード風光る
亀鳴くや墓場へもつてゆく話

木の芽雨明日がゆつくり立ち上る
寒餅や歯なしばあさん話好き

太陽に親はあるのか春日傘
悪相の裸足の客人であった

いのちなきいのちに灯る春の星
知らぬ鳥けと鳴く草もけと青む
春の泥跳んで私はカンガル

瀬戸 悠 抄出

雨降れば雨の明るさ花菜畑
鶯のもうひと声に耳澄ます

すべりよきカーテンレール春さざす
木の芽雨明日がゆつくり立ち上る

月光の切つ先ゆるむ二月尽
蹲の水かげろふや春障子

花びらとなりて自由や山桜
鳥の影さつと二月の跨線橋

春布団干しくぐもれば胎蔵界
本当は吹き荒れている猫柳

市川めぐみ

池田 忠山

尾崎 一夫

中根登美子

柳川 楊雨

杉崎 せつ

佃 悦夫

須田 聡子

大石 雄介

杉山あけみ

片野 節子

肥後ちさこ

吉田 百代

中根登美子

池田 令子

高橋久美子

片野 秋子

山田 照子

田畑ヒロ子

大石 和子

俳句おだわら（5・19メ切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（4・23）

久江報

天よりの大師散華の花吹雪

足立 和子

構へなき日々の安けし諸葛菜

川本 育子

青き踏む土の気鎮め蹠かな

高橋 小糸

十葉を干して息炎なりし日々

山崎 悦子

石鼎句集繙くひと日藤明り

近藤 久江

◆みなみ（4・17）

かほる報

陽の匂いゆたかに巻いて春キャベツ

豊田 幸枝

青空を無限に使い初つばめ

市川めぐみ

格子戸の続く家並花は葉に

斎藤 静

健診を明日に控えて蜆汁

加藤 健治

起き抜けにシジミ汁あり日曜日

飯田 愛

初蝶にやさしく言葉かけにけり

小瀬村信子

さくらさくら孫と楽しむ糸電話

加藤れい子

たすきなく菅笠もなき茶摘かな

村上 龍山

モナリザのうるむ眼差し蝶の舞ひ

加藤 富江

はしゃぎたる紋白蝶とランドセル

加藤かほる

◆零（4・18）

史郎報

花空木思い届かぬ日々なりぬ

青木たけを

サングラスそれにマスクでだれだろう

井上 良子

百合咲けば百合を供花とし独り言

木村 和彦

サングラス歩き方まで変わるなり

佐藤 正子

緋のぼたん雨粒確と支えおり

中村 裕子

家庭菜園馬鈴薯の花ひとつ咲く

野川木一路

馬鈴薯の花の向こうを葬の列

伊藤 道郎

電線を辿ればフクシマ燕来る

岡本 史郎

◆春野（4・18）

きよ志報

散骨の舟に花びら降りかかる

内田知江子

百足虫を退治して諍ひを忘れ

二見 和江

春シヨール風がほどいてゆきにけり

伊藤はる子

線量を測られてゐる春の土

瀬戸 悠

遺産てふペンペン草の長屋門

尾崎 一夫

惚けたる母たんぼぼの絮とばす

秋山 昇

花は葉に共に祝ふや喜寿傘寿

長谷川きよ志

◆香雨・梅ごち（4・25）

忠山報

鳥ごえに耳あそばせて春の朝

肥後ちさこ

行く春やひとりに広き家となり

関戸わよこ

行く春や念入りに拭く窓ガラス

青山 典子

もてなしはお国言葉で遍路宿

門松 鳳文

菜園に日の匂ひまぜ春の土

吉田 百代

ひとひらは盃の中にも花吹雪
吸物の花麩くれなる春惜しむ
ときをりは洩れ日も揺るる藤の花
やすらぎは濠の水にも花は葉に

◆沈丁(5・1)

寶子山報

吉田 康雄
陌間みどり
小澤 純子
池田 忠山

梨棚の花の盛りを風渡る
五月雨や客待つ車夫の眉の濃し
はみだしもみんな友達葱坊主

久保寺トミ子
田淵 令子
田中 幸子
つとむ報

とりたての絹莢ずくし朝の膳

中野 文子

新緑を見上げる犬の散歩かな
川風の一本径や麦の秋

板谷 雅泉
植松テル子

雨音を吸いこんでいく樟若葉

若村 京子
柳澤ミサ子

春昼の猫のごとくに熟寝うまいかな

神山つとむ
たか志報

青空へ大手を広げ莢えんどう
一面がグリーンピースの昼ごはん

田中 恵一
河本 純子

藤房の隙より白き昼の月
薫風や憲法九条永とこえに

岩本ひさみ
杉本 久子

枯れし花まだ端につけ莢豌豆
里山が背のびしている若葉かな

瀧本 敦子
勝木 澄子

親子してショーの飛沫を浴ぶ五月
夕暮れの卯の花降り連歌橋

木村 幸枝
新井たか志

でで虫のお供や婆の車椅子
どこにでも頼つてみたい蔓豌豆

菅野 英余
高井 幸子

雪やなぎりハビリの数増えてゆく
永き日や忘れた頃に鳩時計

尾崎 幸子
尾崎 竹詩

杉襖据ゑて色濃し山桜
絹莢の手あたり次第なる朝ぞ

片野 節子
寶子山京子

桜薬歩幅の合わぬ人と居る
歯みがきのミントの香り柿若葉

中山 妙子
和田恵美子

菖蒲湯に身をゆだねたる八十路かな
校庭の空にあまたの鯉泳ぐ

幸子報
大塚 行人
神野美代子

二人して無駄な買い物山笑う
先生の章駄天走り百千鳥

石田加津子
竹下由里子

門標の日焼けの太字大雄山
母の日や引き出し奥の黄楊つげの櫛

湯本とし子
加藤まり子

◆たけのこ(5・10)

悦女報

三木 泰子

十年の歳月を飲む梅酒かな
ありんこの行列どこへ小半刻
新緑の濃淡陰陽走り抜け
喝入れて等身大の草を引く

◆おほる(5・12)

お早うと笑う友の目風薫る
桐の花天を突き刺す野望かな
葱坊主何にも弾けた日のありし
そよ風に田の土匂う五月来ぬ
母の日や日々慈しみ子は母に
風を吸い夢を吸い込む鯉のぼり
暁闇の小余綾の磯卵波立つ
織りなすは風と光の聖五月
初みどり鉢の音は鋭角に
食むように嬰は乳房を聖五月
沙羅の花諸行無常の雨に散る
木洩れ日に一際映える森五月
雑念を手放し行くや五月風
夏あざみ青春の夢蘇る
人の声動く方へと薔薇薫る

小宮 早苗
徳田 公子
久津間百合子
宮崎 悦女
昌男報

茄子の花チャペルの鐘が鳴っている
梅雨近し背筋伸ばすが老いの行
かきつばた行方の知れぬ大振袖
芍薬や八方美人と言われても

石井 秀稀
井上 和子
佃 悦夫
佐々木重満
十五報

◆鷹(5・7)

高橋みどり
中津川晴江
中根登美子
中村 昌男
廣田 悦子
二上 光子
横塚 昌平
石井きよ子
石井千代子
小野 菊土
香川 花子
風間 秀泰
加藤 春江
坂入清四郎
瀬戸とみ子
重満報

苗札の幼き文字や屋敷畑
花冷えや調剤室の台秤
烟るがに吾が歳月や母子草
山笑ふ老いの写真の無表情
ラジオから正午の時報茄子の花
其処此処に羊草食む春野かな
チェロ立てて雨のバス停半夏生
春野行く乗馬の列の見え隠れ
暮れかぬる定時退社の無聊かな
青信号高く手を挙げ入学す
農小屋へ短き坂やにほひどり
虹二重なし夕刊を待つ時間
ゆくりなく清水に逢ふ桜の夜
健啖のわが骨密度牡丹の芽
蝌蚪ふるふ水に喝采あるごとし
波間よりかもめとび発つ春うらら

青木 孝子
池田 令子
西賀 久實
佐宗 欣二
須田 晴美
中田 笑子
百川 秀子
山崎美知子
庄司 下載
瀬戸 りん
高橋久美子
中山智津子
齊藤 桂
芹澤 常子
畠 梅乃
山口安規子

◆草むら(5・19)

花冷や紙幣使へぬ食券機

甲板のゆれに踏んばる立夏かな

摺り足で渡る吊橋海霧深し

轉りや歩荷と休む古株ふるくせ

三代の稻荷ずし屋や五月来ぬ

函嶺の入り日おだやか揚雲雀

夕飯はカレー饅頭や花疲れ

利休忌の雨脚強く暮れにけり

躑躅燃ゆ腹立つ時は腹立てて

合格の子に教へたる米の量

車庫入りの電車に降れる桜かな

白牡丹小さき番傘さしてあり

ぼうたんや時々あやす負んぶの子

青空を新樹押し上げ試歩百歩

足裏は扁平なりぬ簞

この町は水が旨いや花水木

余所の子の嫁ぐ話を凌霄花

幼な子の跣足で歩く笑顔かな

早起きの素足に力貰ひけり

瀬を抜ける魚影きらりと草矢かな

◆無所属

大木 敬子

大島美恵子

北崎 修

田下 昌人

中根 和子

市川 好子

加藤 幾代

高橋 正子

守屋 まち

米山 翠

來田 新子

大沢 年子

片野 秋子

小林 環

近藤 絢子

下平 美子

杉崎 せつ

関根 琉子

鳥海 壮六

古屋 徳男

村場 十五

サイダーの体内トンネル突つ走る

薺咲く十坪にみたぬ店舗跡

リュック背にヒール鳴らして花の街

賽銭のこところ風光る

薫風に染まるシーツのおおきさよ

母の日や小銭を持つて子供客

里山に夏の灯ふえて楽しきよ

晩年は初歩に戻りし古茶新茶

雷遠ししすかに闇が発酵す

薔薇に害虫スプレー昆虫がいない

風を呼ぶ枝垂れもみじの赤々と

柏餅のんびりしている君といる

うぐいすの林道ダンプカー疾駆

でんでんむし入力ミスとエラーかな

草笛の悲しきまでのビブラート

片腕の短距離走者はくもくれん

突然の空木は白きあまりにも

ポップコーン弾けて鷹は鳩と化し

薫風や外してマスク裏城址

月おぼろ話は前後するけれど

風薫る川のほとりのカフェで待つ

小林永以子

一ノ瀬茂代

出澤 洋子

木村美千代

須田 聡子

澤口 文子

鈴木久美子

北村 文江

小澤 園子

岩楯恵津子

石田 和代

穂坂志げる

山田 照子

瀬戸 正洋

田畑ヒロ子

大石 雄介

大石 和子

小島ノブヨシ

蓑宮 わか

杉山あけみ

岡田 典代

山口 千代

山口 千代

大根煮る円周率のうやむやに

加藤 健治

(令和3年2月号)

作者はかつて数学教育に携わった方。数学に関わる句はいつも楽しく拝見し、今回も納得のいく佳句である。

季語の白、ノートの白の取り合せ、その上での無限という数をうまく表現し、 π の世界へと永遠の不思議を誘っている。これからも句の世界で楽しませて下さい。

鈴木久美子

斜度三十上れば畑葱坊主

村場 十五

(令和3年4月号)

上五に斜度三十の数字を詠み、単に坂道といわず此の数字で世界が広がり、力強さを感じました。

三十度の坂を上りながら大変さの中に、喜びも満足感も読みとれました。又、葱畑の上空は広々として清々しい空気も伝わって来ます。多くの可愛らしい葱坊主にも迎えられて、作者のこの上のない満足にも共感しました。

此の一句を目にし、強さと優しさと清潔さを共にしている様な幸せを感じました。

穂坂志げる

潮の香を存分に吸ひ磯遊び

久津間百合子

(令和3年4月号)

若い頃、父親から「道端の石っころで俳句を作ってみな」と言われたことを思い出した。

個人の主観で無く、誰が読んでもサラリと共感できる、僕の大好きなタイプの佳句だと思いました。「春の磯」と「わたし」しか材料が無いのに「存分に吸ひ」と言う動作を表現する言の葉に出逢った瞬間に、「人間の本质」を突く「真実味のある感情表現」を読ませていただきました。感謝です！

若村 京子

いのちなきいのちに灯る春の星

須田 聡子

(令和3年4月号)

星に命はあるのだろうか？ いや見る人にとっては重たい「いのち」。災害で亡くした親、子、姉妹等々、星となって生き続けている。生きている人達は星を見ることがこの世では命なき人達から、生きる力を貰う。挫けず頑張る力が「いのちに灯る」となって心に蘇る。春の星で重たい句が軽くなり、春の装いと共に明日をも励ましているような秀作。ありがとう!!

中根 和子

雉啼くや休耕田の草の丈
夏つばめ我が庭低く突つ切れる
父の日やドアに踏ん張るストッパー
玉葱を吊せし軒や夕チャイム
橋下を風と潜るや河鹿笛

中津川晴江

輝いて二カラット程実千両
一病を持つて寄り添う寒の水
白髪葱余生は涙もろくなり
顔馴染み引き鴨の声聞かせ行く
妻でいる今を大事に花の旅

佐藤 正子

横^は浜のバラ赤い靴の児気丈なり
子供の日絵本の象はやさしくて
籠もる日々修繕してる夏燕
大輪やコロナ忘れるアマリリス
蜘蛛の糸自転車こいで去る老夫

坂入清四郎

外堀の風と遊ぶや花筏
山山に色どり添えし新樹光
柿若葉光の波を一人占め
青天の空を目ざすか立葵
春雷に押されて急ぐ子等の声

豊田 幸枝

泡ひとつ浅蜷の吐息かもしれぬ
吊橋は柚の近径谷うつき
読み返す祝辞のメモや新茶の香
みどり児の湯を蹴る力柿若葉
薫風や濡れ縁という社交場

小林永以子

サン格拉斯かつこ良かった昭和かな
大磯のロングビーチやサングラス
子供らとの海の記憶やサングラス
口紅を濃く塗り直しサングラス
来し方は99%サングラス

米山 翠

青空に輝く富士や粉下す
夫婦して蓬摘みたり日の恵み
雨戸繰る夜明の庭や花葵
膠煮る木地屋通りの南風かな
麵麩生地を抜きたる原爆忌

二見 和江

もういらぬもう充分と露を抜く
緑さす風にも嬰はあやされて
人は一人機械は一つ田を植うる
甘も美も与へられたるさくらんぼ
草を引く一人になれる時間かな

青山 典子

遠富士が近くに見えて風薫る
夏用のスリッパ揃え友くる日
朝の窓新緑の香を迎えいれ
母の墓舞つて離れず揚羽蝶
若葉風朝のパン屋の列並ぶ

岩本ひさみ

今は昔ひと日で終る田植かな
青田風ロマンズカーは東京へ
川風のやさしき日なり桑苎
自家採りと遠慮し枇杷を配りけり
雨を待つ紫陽花風に逆らわず

加藤れい子

灯を消してより不意打ちの春の雷
人影の無き薬師堂花満開
さくらさくら孫と楽しむ糸電話
摘草や卒寿のいのち愛ほしむ
鬻未だ結えぬ力士や春の街

久保寺トミ子

水温む農業日記始まり
春の水節太の掌を浸しけり
新しき鋤軽々と春の朝
朝まだき鴉の群るる春田かな
野の風の青き匂ひや夏近し

俳句おだわら鑑賞（令和3年3月号）

空っぽのバスが又行く寒さかな

二見 和江

最近路線バスを見ると、乗客がほとんどいないことが多い。車社会とはいえ、高齢の方々にとってバスは大事な足である。やはり過疎化が進んでいると同時に、コロナ禍で外出出来ない状況も加わっているのだろう。掲句は、そんな社会の一面を切り取っている。童話のようなやさしい表現が、かえって身に沁む。「又」という言葉はいつもそうなんだろうと想像が広がる。さらに「寒さ」には、現状や地域の未来までも危惧する深い意味が込められていると思われた。（小林 環）

＊お知らせ

例年九月実施の笛まつり俳句大会は諸事情に鑑み令和三年度も全面的に中止となりました。来年度実施時には皆さまのご支援をよろしくお願い申し上げます。

（みなみ俳句協会）

◆理事会日程

6 / 10 7 / 8 8 / 12

いずれも木曜日午後六時からけやき